

雨の五郎

長唄

全詞章

三升屋二三治

作詞

杵屋六左衛門

作曲

天保年間

去る程に曾我の五郎時致は、不倶戴天の父の仇、討たんずものと弛みなき、弥猛心も春雨に、濡れて廓の化粧坂、名うてと聞きし少将の

雨の降る夜も雪の日も、通ひ通ひて大磯や

廓の諸訳のほだされ易く、誰にひと筆雁の伝手

野暮な口舌を返す書

粹な手管につい乗られて

浮気な酒に宵の月、晴れてよかろか晴れぬがよいか、兎角霞の春の癖

いでオオそれよ我も又、いつか晴らさん父の仇、十八年の天津風、いま吹返す念力に、

逃さじやらじと勇猛血気

その有様は牡丹花に、翼ひらめく小蝶の如く、勇ましくも又健気なり

〔二上り〕 藪の鶯気俣に鳴いて、羨しさの庭の梅、あれそよそよと春風が、浮名たたせに

吹送る

堤の葦鶯草は、露の情に濡れた同士、色と恋との実比べ、実に浮いた仲の町よしやよし

孝勇無双の勲は、あら人神と末の代も、恐れ崇めて今年また、花のお江戸の浅草に、

開帳あるぞ賑はしき